



G
A M E

RCGS
立命館大学ゲーム研究センター
Ritsumeikan Center for Game Studies

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research



ゲーム産業生成における
イノベーションの分野横断的なオーラル・ヒストリー事業
EMERGENCE of Industry,
An Oral Historical Research Project focusing on Game Industry

西角友宏第1回インタビュー後半：高校時代からパシフィック工業への入社まで

江藤 学
生稻 史彦
金 東勲
木村 めぐみ
中村 彰憲
鳴原 盛之
清水 洋
山口 翔太郎

Tomohiro Nishikado, Oral History (1st, 2): Since High School
Days until Joining PMC

Eto, Manabu
Ikuine, Fumihiko
Kim, Donghoon
Kimura, Megumi
Nakamura, Akinori
Shigihara, Morihiro
Shimizu, Hiroshi
Yamaguchi, Shotaro

目次

高校生時代：始まり	4
高校生時代：接したメディア（映画）	8
高校生時代：アンプ	9
高校生時代：音楽レコード	11
電子工作・アンプの仕事場・作業場	12
アンプの部品代	13
高校生時代：将来の道、大学	13
東京生活の始まり	14
東京生活：秋葉原	17
大学時代の始まり	19
大学時代：影響を受けたメディア（テレビ、漫画、映画）	20
東京オリンピック	21
大学時代：ゼミ、就職	22
就職：音響メーカー	23
音響メーカー：オーディオに関わる仕事	25
専門学校	27
テレビの修理：図面、回路図	28
音響メーカーの強み弱み	29
音響メーカーを辞めた理由	31
再就職：パシフィック工業	31

再就職の決め手：荒井さん	33
配属：生産	34
生産、製品検査から学んだこと	35
「スカイファイター」：生産技術から開発へ	36
荒井さん：誘った理由、仕事関係、パシフィックでの仕事	37
「スカイファイター」の企画・開発	41
「スカイファイター」の位置付け、企画のヒント	43
「スカイファイター」のデビュー、「I」から「II」へ	45
アメリカから「ボン」が出現	47
部署異動：資材部へ、デジタルIC	48
「ボン」からの学び	50

高校生時代：始まり

Q：1959年から高校ですかね。

西角：そうです。

Q：56年から59年が中学で、59年の4月からだと思っんですけど。

西角：そうですね、そうやって日にちを見てれば、そうですね、はい。

Q：こちらの私立に行かれて。高校生活はどういうことをやられてたんですかね。だんだん、そこから機械の興味がもっと、こう。

西角：高校はね、科学部じゃなくて化学のほうでクラブに入っていましたね。それは1年から2年間ぐらいやってましたかね、化学のクラブをやりましたね。あとはクラブはそのクラブ入って、あと、そう、さっきの手品のクラブも、ちょっと。

Q：手品、はい、手品。

西角：ちょっとのぞいて、それが半年ぐらいでやめちゃいましたけど。結構いろんなの覚えて、手品覚えてやめましたけど。だから、みんなの前で披露するとか、そういうあれは出なかったんですけども。一応、クラブに籍は置いておりましたね。高校はミッション系のスクールで、大阪市内、電車通学で通ってましたね。

Q：人数は大きい高校だったんですか。

西角：大きいですね。1学年1,000人以上いましたね。1クラス50人ぐらいいたやつが二十何クラスありましたんで、1,000人以上いましたね。それが3年で3,000人ぐらいいたんですかね。すごい。

Q：大きいんですか。

西角：当時はみんな、私立もそうだけど、高校そのぐらいの人数いましたね。人数が多かったですね。

Q：どういった高校生だったんですかね。

西角：高校生は、そうですね、わりと化学も好きだし、ラジオのほうは相変わらず、最初の1~2年の時は、1年ぐらいの時は引き続きやってたと思うんですけど。音楽ちょっと凝るっていうか、その時、ステレオっていうのが出始めたんですよ。その前からあったんでしょけども、結構ポピュラーになって。そのステレオ作るのがちょっと楽しみになって。これはいわゆるラジオじゃなくて、オーディオのほうに結構はまりましたね。家ではアンプを何台も作って、何台作ったか分かりませんが、何台も作って、「1個作りゃいいんじゃないか」と親父なんかは言ってるけど、何台も作って、そのたびに入れ替えたりして聴いてましたけども。当時、真空管ですよ。真空管のオーディオのアンプを、5台ぐらい作ったのかな。全部でもっと作ったかもしれませんが、作って、壊したりして。最終的には……。要は音が大きい、出力の大きいやつ、でっかい音が出るのを、また音質も分かんないんだけど、こうすると音が、音質が良くなるとか、そういうようなテクニックを使って、品質のいいものを作ろうとしてましたね。それは結構、高校の時の趣味だったような気がしますね。

Q：それは本を見たり？ どういったところから。

西角：その頃はもう本ですね。今でもある「無線と実験」っていうのがあったんで、今でも本、売ってるんじゃないですかね。そういう本を買ってきて、そこからそのまま作ったり、自分でアレンジしたりして作ったりって、はやってましたね。

Q：一緒にアンプを作る仲間とか、そういうのは？

西角：いましたね、裏に1人いました。私がどっちかというと教えた、逆に私が教えたやつなんですけど。自分のうちの裏にいまして、彼も作ってましたね。彼は私ほどそんなに深くはやらなかったか知りませんが、お互いに共通でやりながら、見せっこしながらっていうか、こういうのできたよというのを自慢しながらやってましたね。

Q：それは同じ高校のお友達なんですか。

西角：いや。高校はね、そいつはさっき言った岸和田高校って頭のいい学校行って、私よりもいい学校、いいっていうか、私が落ちた学校へ行ってんですけど、行ってたんですけど。高校は別でしたね。

Q：中学校は？

西角：中学は一緒でしたね。

Q：実家から高校へ行って、あまり寄る機会もなく。

西角：結構寄り道して帰りましたね、その日本橋も。今度はわざわざ電車で行かなくても、高校の帰りがその日本橋の電気街のそこなんで、寄り道して帰ってましたね。あと大阪の繁華街で、当時ジュークボックスがはやってたんで、人がたむろしてたところで一緒にジュークボックス聴いたりしてましたね。結構、岸和田って田舎、田舎っていうか街といっても、やっぱり外れですから、大阪市内だと結構いろんな場所、にぎやかなところあるじゃないですか、デパートもあるし、珍しかったのもあったんで、寄り道したりして帰ってましたね。

Q：それまではご家族で大阪市内へ、そういうふうには休日に行ったりとかは。

西角：家族ですか。家族ではうち、あんまり行った覚えはないんですよ、出掛けるの。親父が職人ですから、休みは気が向いた時しか休まないんで、平日ぐらいしか休んでないでしょうから、ほとんど休みなかったんじゃないですかね、親父のほうは。だから、家族で出かけたっていうの、覚えてはないんですよ。親父とは近くへ釣りに行ったりとかそういうのはあるけど、全員で行った覚えっていうのはないんですよ、遊びに行っただっていうのは。母親とはまたどっか行ったような覚えはあるけども、全員でっていうのは。以前に兄弟に会ったときにも、「うちは、ほんとに家族ではどっこも行かなかったよね」って話をしてましたね。親父の職業柄もあるんでしょうけども。

Q：お父さま、お母さまから、何か高校生の時によく言われたことはありますか。

西角：よく言われたのは、母親が、高校行って、おまえはわりと性格のんびりしてる方だったんで、学校の先生になれとは言われましたね。自分が先生をやってたんで、おまえ学校の先生が向いてるといって、学校の先生を目指せと言われましたね。それは母親には言われましたね。

Q：その時、どう思われましたか。

西角：嫌だったですね、学校の先生は。

Q：嫌だったんですか。

西角：どっちな、その頃になると技術屋みたいな、アンプとか作ってたんで、電子技術っていうか、こういうものを作る、当時だったらソニーだったと思うけど、そういう大手の電気会社で電子回路みたいなのを設計してみたいなっていうのは、もう高校になるとちょっと目標がしっかり、はっきりしてたんで、そちらにと思ったんですよね。

Q：受験も最終的にはそっち側のほうの大学を目指すというふうになっていったんですか。

西角：母親にも言われて、うるさく、結構うるさく言われまして。受験は、大学の受験は現役の時は、あれ何でしたっけ、教育学部、学校の先生になる。相当受けさせられました、どっちなかというと、受けさせられたかんじで神戸大学の教育学部と京都学芸大学、いわゆる学校の先生ですからね、その2つを受けて。ほかは、もう受けるなとは言わないけど、その2つ、親に言われるままにそこを受けたような気がしましたね。実はそれ受かったんですけどね、親には落ちたと言って。今みたいに連絡は来ないですから、もう見に行くだけですから、私が見に行つて。いや、残念だったって。向こうも意外としつこくなく、「そうか、残念だな」って。で、しょうがない、どうするかっていつて、1年浪人してちょっと、っていうことで。浪人して大阪の予備校でも行こうと思って、たまたま東京から来てる人と知り合いました、東京から大阪に出張に来てる人がいて。その人とちょっと仲良くなりまして、で、東京のほうへ出ていくんですけど。で、東京へ出て行くっていう感じですね。

Q：これやっぱり、本当は電気のほうでやりたいという思いがあったから、あえて。

西角：そうですね。電気というよりも学校の先生にはなりたくなかったですね、なぜか。でも、今、後になってから、やっときゃよかったなと思ったり、その当時の。今は大変でしょうけど、学校の先生やれば、夏休みは、母親が言うには学校は休みだし、「おまえみたいなぼーっとして、ぼーっとじゃないけど、苦勞してないのはちょうどいいよ」って、なんかそんなような、変な理屈で言われましたね。そんな悪かったのか分かんないけど。先生ってわりとその当時は楽だったのかもしれないですね。「先生、先生」って、みんなから尊敬されてね。

Q：尊敬されて。

西角：わりと、ちょっと威張っていればいいというような時代だったでしょ、先生っていうのは。

Q：そうですね。もし先生になってたら今頃インベーダーはないと。

西角：そうそう。

高校生時代：接したメディア（映画）

Q：当時、自分が接したメディアであるとか、映画であるとか、こういったものが高校時代は印象深く残っているんですか。

西角：高校はよく映画見に行きましたね。映画部っていうのもあったんです。それはクラブだったか同好会だったか、映画の学部がありましてね、高校の時に。私、入ってなかったんですけども、そいつと友達だったんで、そいつとよく映画を見に行きました。黒澤明の映画とかはほとんど見たような覚えがありました、その当時出てるのは、その当時上映されたのは。黒澤明とか、何だろうな。

Q：洋画とかは。

西角：洋画も見ましたね。「十戒」とかそんなような、結構アカデミックな、何て言うか、そういうような。映画鑑賞クラブにいたやつが友達だったもので、そういうのをよく見に行きましたね。

Q：黒澤明だと「七人の侍」とか。

西角：「七人の侍」、何回も見ましたね、あれ。そいつもしつこいんですよ、1回見るだけじゃない、何回も見るとはですね。確かに何回見ても面白いんですけど、面白くても、うんと見てたやつ、僕らぐらい。映画館でも3回ぐらい見ましたね。昔はビデオも何もなかったんで、映画館で見るしかないですね。どっかで上映したら、それ行こうって、どっかでまたしたら、行こうっていうような感じで、映画館まで行ってましたね。

Q：特撮ものとかは。

西角：特撮ものも見ましたね。

Q：どんな。

西角：特撮、あの当時に特撮ものって何があったんですかね。

Q：「ゴジラ」「キングコング」とか。

西角：特撮ものは見なかったかもしれないですね、見てないかもしれない、高校ぐらい。

Q：見てないですか。

西角：ええ。「ウルトラ Q」っていうのは、もっと後ですから、あれは見ましたけど、あれはもっとあとなんで。高校の時はあんまり特撮ものは見なくて、いわゆる「七人の侍」とか黒澤明の映画をよく見させられた、見に行きましたよ、「天国と地獄」とか。

Q：洋画は「十戒」とか「ベン・ハー」ですか。

西角：「ベン・ハー」、もうちょっとあとだったか。「ベン・ハー」も見ましたが、あの時期だったかな、「ベン・ハー」も見ましたね、それは。

Q：結構、映画も見る、比較的見る学生になったというか。

西角：そうですね。そいつと友達になったおかげで、結構、映画は見に行きましたね。タイトルも忘れましたが、よく映画は見に行っていました。

Q：月に何回ぐらいですか。

西角：月 1 回ぐらい行ってたような気がしますね。そいつはクラブなんで、映画クラブに入ってるから、もっと見てたろうし、いろんな映画を見て感想会議みたいなやるんじゃないですか。私はクラブに入ってなかったんで、友達だったんで一緒に連れていってもらっただけだったんですけどね。映画は比較的に見ましたね。あとは自分でやってた化学の、化学は1~2年の時は真面目にやりましたよね。

高校生時代：アンプ

Q：電子工作は徐々に減って、アンプをやりながら。

西角：それは、ええ、アンプはやりながらですよ。化学実験に一時期凝って、家で実験もやり始めましたけど。学校でやってるんじゃないで、家でもやって。当時は大阪に道修町ってあるんですよ。そこへ行くとね、今でもありますけど、薬問屋なんですよ。そこへ行くと薬品売ってくれるんですよ、今じゃ考えられないですけど。シアン化何とかとか、劇薬ですよ。メッキで使うようなやつも売ってるんですけど、それは買わなかったんで

すけど。そういうのを買ってきて、私は硫酸銅とかああいうのを。ちょっと劇薬でも軽い、これで銅メッキをしたり、そういうのを、電気分解したりしてやってましたね。1回自宅で電気分解しましてね、塩素が出るんですよ。あれが出て、近所で大騒ぎになって、隣からクレームが来た覚えがあります。今だったら警察沙汰になるけれど。塩素って重いから下を流れていくんですけど、誰も気が付かないんですよ、こぼれちゃってるの。ずーっと流れてって、近所の人気が付いて。「兄ちゃん、何やってるの！」とかって言うと、来て、開けたら。そうそう、うわーっと掃いて外に出したんですけど。近所の人塩素なんて知らないもんだから、電気分解とか、電気メッキとか、そういうのはよくやってましたね。薬品はいろんなもん買って、実験してたんで、その薬問屋にもよく行きましたから。自分で実験、学校でももちろんやったんで、それと同じようなものを家でやってみようと思って、家でも実験してましたよね。

その実験する頃、親父が仕事場してて、私がおの後ろぐらいなんだけど。で、時々、爆発するんだけど、親父はあんまり無関心で、文句言わずにじっとそのままやってるんで。1回、それは化学実験じゃなくて、アンプ作ってて、コンデンサーっていうのがあるんですけど。あれ、電圧、耐圧っていうのが決まってるんですけど。100ボルトぐらいの容量の少ないやつに間違えて300ボルトをかけると爆発するんですね。音がバーン！と中に入ると。それやった時にびっくりして、ハッと見て、親父が振り返るかなと思ったら振り返らずにそのまま仕事してたから、あんまり何も言われたことないですよ。結構やけどしたり、爆発したりして、昔はやってたんですけど。今だと、そんなもん、真空管なんか作ってくれていわれても、私もできないですよ、あれ。300ボルトぐらいだか、二百何十ボルトとかのが一般ですよ。今はもう弱電ですから、3ボルトとかでしょ、電子回路は。昔は真空管の時代ですから、高圧掛けないと電子が飛ばないんで、300ボルトとか250ボルトとか。

Q：すごいですね。

西角：ええ。家庭の電気は100ボルトですが、それには300ボルトぐらいのショックが来ますから、バカーンと、触るとね。今、作ったって、今なんてそんなの怖くてできないですよ。電源作って、電源入れた時はうれしいか、怖いか、どっちか。入れてバーンと爆発するんじゃないかなという瞬間ありますよ。電源出来上がって一応回路をチェックするんですよ。もう一回チェックして、もう大丈夫だと思って、ポンと電源入れた時に、その時の瞬間がね、ちょっと何とも言えない。うれしい反面、怖い反面でね。何も音しない時、ブーって。何か言うだろう、何も言わずにこうやって1回電源入れて、しばらく切ってから何かあったかなと思って、またもう一回電源入れて。その時のスリルというんですかね。でも、音が出た時にはやっぱり楽しみですよ、そういうことで。

高校生時代：音楽レコード

Q：アンプにはまって行って、音楽はレコードもたくさん聴いたりしましたか。

西角：レコードも結構、クラシック音楽とか、その時は洋楽だとプレスリーとか、はやってる時代だったんで、結構レコード集めましたね。音楽もだいぶ聴きましたね、あの頃は。

Q：かなり音楽にははまり始めた。

西角：そうですね、音楽には結構、クラシックが多かったかな。

Q：クラシック、どんな作者、作曲家というか。

西角：一番最初は親戚の、親戚っていうか、東京から来た人、私が東京へ来るきっかけになった人から、最初にもらったのはベートーベンの「運命」だったかな。ああ、結構クラシックっていいなと思って、そこから自分で買い始めたんですけどね。だから、アンプだけだったらあれだけど、スピーカーがないと、もちろん。スピーカーとスピーカーボックスっていう箱があるんですけど、それにも結構凝って。スピーカーボックスにこういう穴を開けるんですけど、下を開けると低音が出るとか、そんなのいろいろ工夫しながら。まあ、関係ないと思うんですけどね、そんなに比べても。自分で思うだけであって、下に、こういう形で穴を開けると、何センチの穴を開けるとたぶんいい音が出るはずだとか思いながら、いろいろな形で、スピーカーボックスは木があったんで、いっぱい作ったような覚えがありますね。何個も作って壊す、作って壊して。でも、今から思えば、あんまり音は変わらないと思いますよ、スピーカーは。もちろんスピーカーは大事ですけど、スピーカーボックスの下にこういう風穴を開けて、低音が下からたくさん出るんだというような、そういう。本には書いてあったんだけど、自分では穴を開けたから、いい音が出てるといふ錯覚に陥って聴いてるだけであって、自己満足みたいなもんですよ。というのも、結構楽しかったですよ、工夫しながらやってるのが。

Q：お父さんの仕事場の後ろでそういうことをやってたんですか。

西角：真後ろじゃないですけど、ちょっと離れているんですけどね。親父は背中を向けて、向こう、どっちかという店の外を見て仕事をしてる。中より外を見てやってるんで。私も後ろでやってるから、あれ、たぶんステレオで音聴いた時、うるさかったんじゃないかと思いますよ、ウワーッと、結構大きな音で聴いてたんで。仕事場の横で私も自分の作業場じゃないけど、自分で仕事をする時。勉強する時はもうちょっと別の机があったん

だけど、そこはどっちかという自分の作業場みたいなのをもらってたんで、そこで高校の時はアンプを作ったりしてたかな。

電子工作・アンプの仕事場・作業場

Q：中学の時もそうでしたか。

西角：中学の時もそこでした。

Q：仕事場っていうか。

西角：仕事場ですね、ええ。

Q：作業場。

西角：作業場の横ですよ。

Q：いつ頃からいたんですか。

西角：その場所ですか。中学ぐらいですかね。親父がちょっと片付けて、そこを、板の間の所をちょっとだけ空けてもらって。ここで何か作れって言ったと思うんだ。その横にはもう木材はあるし、のこぎりとかそういうのも使っているけど。お客さんのを使うんじゃないから、家のやつを使って木を切ったりしてましたね。だから環境は非常によかったですね、ボール盤とかもあつたし。

Q：弟さんは何をしてたんですか、そういう時には。

西角：弟は全くやらないですね。

Q：全くやらないんですか。

西角：全く。そうだ、弟、何をやってたのかな。弟は私よりも何もしてなかったですね。あんまり趣味はなかったと思います。今でもあんまりないんだけど。意外と存在がちょっと薄かったような気がしましたね、年も離れてるんで。その頃になったら、一緒にも遊ばないし。弟はやっぱ外に出て友達と遊んでたんじゃないですか。家の中では、ほとんどそういう一緒にした覚えもないし、私がアンプ作って音を聴かせた覚えもないし。その頃

はあんまり口も利かないような状態だったような気がします。口っていうか、あんまり干渉しないような状態だったんで。どっちかという、何だか意見を言うのは親父のほうだったみたいですね。うるさいとも言われなかったし、口出しもされなかったし、まあ、好きなようにやらせてもらいましたね。

アンプの部品代

Q：アンプとか部品代は結構かかると思うんですけど。

西角：かかりますね。真空管って結構お金かかりますよね。今作ると、今でいう、その当時でも何千円かはかかったと思いますね、1個作るのに。今でもその当時のアンプをそのままきちんとやった30万とか40万ぐらいで、真空管のやつ、売ってますけど。今は真空管出てないから高いんでしょうけど、そんなような似たようなのをその当時作ってましたから。お金はたぶん親父が全部出してくれたと思うんですよ、父親が。でも、私、高校の時、アルバイトなんかしてなかったんで、全部親の金、すねをかじって、親父が出してくれましたね。

Q：親はそういうところにお金を出す時には、全然いとわずに、どんどん？

西角：結構お金もそうですね、いとわなかったですね。親が出してくれました。

高校生時代：将来の道、大学

Q：それは教育になるという考えで？

西角：そうですね、あの当時は。親は、うちの父親は学校の先生とかにはならず、こういう。本来なら、昔だったら自分の仕事の跡を継いで、長男って継がなきゃいけないんだけど、そんな話は全くないです。むしろ、おまえらは職人なんかにならなくていいよっていう感じだったし、なれとも言われたこともないし。おまえ、自分もそういうのが好きだったら、自分で好きなようにすればと、直接は言われなくても、そんなような雰囲気でした。親父は無口で、ほとんど話をしないんで。そんなに怒られたこともない。小学校の時に「勉強しろ」と怒られたことはあるけど、それ以外に自分でやってる趣味に怒られたこともないし。ほとんど口は利かないから、職人タイプですよ、わりと。

Q：お母さまは将来は先生になりなさいとおっしゃって、お父さまも見ていたり、将来を考える時にこうやってらどうか、そもそも大学へ行ったほうがいいのかとか、そういうこ

とは言われたんですか。

西角：親父はもう、なぜか知らんけど、早稲田大学行けって言ってましたね。おまえが早稲田へ行くのが夢だと言われたのは親父です。絶対行けという、絶対とは言わないけど、行けって。実は私、早稲田って落ちたんですけど、ものすごいがっかりしてましたよね。それ本当に落ちたんですけど。そうすると、何だか知らないけど、東京に親父はいた、修業時代ですね、職人の修業時代に東京にいたんで、その時に知ってたんですけど、とにかく早稲田が気に入ってたみたいですがね。

Q：高校に行ったら、大学に行くっていうのは、もう普通の道だったんですか。

西角：いや、その頃は大学行くの少なかったですね、当時。実は弟も行ってないんで、私だけなんです、大学行ったの。そんなにみんなが行くっていうわけじゃなく。でも、50%、私が進学校だったんで、私らの高校は70%ぐらい行ってたのかもしれないですね。進学率は結構よかった高校だったんで。

Q：ご自身の中ではそういう高校に行ったのもありますから、大学に行くというのはごくごく自然な流れで？

西角：そうですね。私としてはもう少し上の電子っていうんですか、アンプ作ったんで、もっと専門的な勉強をしてみたいなっていうのはありました。高校ぐらいになったら、やろうという気持ちにはなりましたね。そこへ学校の先生の話が出たんで、これはしょうがない、1年間遊ぶしかないな、高校も浪人するのも一緒やなって。

東京生活の始まり

Q：その1年間は勉強ばかりで、ずっともう。

西角：1年間は東京へ出てきたんです。たまたま、そこでさっき言いました東京から大阪へ出張してる人と知り合いました、東京へ来ないかって言われまして、その人のうちに下宿するようになったんですけど。その人は日本鋼管という所に、そこから大阪に転勤になったんですよ。全く知らなかったんです、私もね。うちの母親ね、クリスチャンなんです。私も教会に子どもの頃は母親と一緒に連れられて行ってたんで。そこでその人と知り合って、うちの母親が知り合いました。日本鋼管へ行ってる出張されてるところにお子さんがいまして、小学生の、私が高校の時、小学校4年ぐらいですかね。その子も一人っ子で甘やかしてるかなんか知らんけど、外を知らないんで、遊び相手になってくれとって。

私はその子どもを、アルバイトですよ、お金をもらって水泳に連れていったり。私、いまだにその人と会うと「水泳の先生」って、私そんな水泳の先生じゃないんだけど、水泳に連れていったから水泳の先生って言ってるんだけど。水泳連れてったり、要は一緒に友達として遊んでやったの、小学校、遊び相手になってやったの。それが縁で、その人が今度東京に戻るようになった時に、その人が同じ勉強するなら東京へ行った方が勉強になるよって言ったら、それを親父に言ったら、親父は喜んで「おお、行くんなら、早稲田へ行けよ」ぐらいでしょうね、たぶん。1年間東京で予備校にまず行かなきゃいけないんで、予備校に行くようになったんですけど。きっかけは東京から来た、転勤してきた方のお世話で、私は行くようになったんです。

Q：東京に行くことに関しては、ご自身では抵抗とか、喜びとか、どういう思いだったんですか。

西角：やっぱり行ってみたいなっていう憧れはありましたよね。あんまり東京へ行く人いませんから、地元から東京なんて。ほとんど、多分いないと思いますよ。だから、周りから見たら、友達から「なんでや？」とか言われて、だいぶ嫌みを言われましたけど。東京を嫌がってましたから、行くのは、大体、東京に。「なんで東京行くの？」とか言われましたけど、私はすごく憧れるっていうか、行ってみたいなと思ったんです。おやじも母親もよく行かせてくれたなと思うんですけどね。4年間たったら、大学出て、こっち戻ってきてね、ちゃんと仕事してっていうような、そういう構想で言ってたんだけど、結局、帰らなかったんですけどね。その4年間、取りあえず、東京行って勉強してこいという話。初め、東京の大学ですね、東京の予備校行って、東京の大学をどっか受けろっていう話で。親父は早稲田と思ってたんでしょうけど、そこまでは親も構想を描いてたんですよ。4年たったら帰ってくるというのは、親の希望だったと思うんですよ、恐らく。

Q：東京では、場所はどちらだったんですか。

西角：東京はね、世田谷の上野毛っていう所に下宿したんです、その日本鋼管にいた人のうちに下宿したんですけどね。そこは半年ぐらいいたのかな。半年いたんですけど、ずっと居候してると気まずい思いもあるし、遠慮もしなきゃいけないんで、親にねだって近くに下宿するようになりました。

Q：東京へ来て、最初の印象はどんな印象だったんですか、来た時。

西角：まず、言葉がびっくりしますよね。言葉がうまく……。関西弁をずっと使えばいいのかなという気持ちもあったんだけど、こっちの言葉を使わなきゃいけないなという。言

葉であんまり。向こうで、うわーっと友達と話しても、あんまりうわーっとしゃべらなくて、もう無口になる。私、結構しゃべるほうだったんですけど、東京へ来てから最初の頃、無口であんまり話さなかった、話をしないようになりましたね。

Q：環境はどうでした？ 環境とか。

西角：環境はやっぱ、あっちの神田とかお茶の水に学校があったんで、大阪と違って大きなとこだなと思って。親父から結構、親父も東京にいたんで、「おい、神田いったら古本屋あるだろう」とかいろいろ言われて、言われたような所へ行って、そうだ、そのとおりのあるんだなというような、あの辺で学生生活を過ごしましたけど。

Q：神田警察署のそばのあの辺りなんですか、東京電機大ですよ。

西角：電機大です。予備校もあの辺にあったんですよ、研数学館とって。水道橋かな。

Q：水道橋ですね、今の東京ドームの入り口辺りにある。

西角：あそこに1年間行ってたんで。

Q：浪人の時代もある程度、映画を見たり、電気工作をしたりと、高校時代のそういうものを続けたんですか、それとも勉強だけにしたんですか。

西角：勉強もあんまりしない。こっちへ来てあんまり。アンプ作った覚えはないですね、こっち来て。作ったかなあ。

Q：何に時間を割いたんですか、そこでは。

西角：大学時代は、何に時間、そういえばそうですね。1年、1~2年の間は一応勉強はしましたかね。やはり、1年……、そうですね。1年の時は勉強して、あんまり。こっちの下宿でラジオ作ったりとか、そんなのした覚えはないですね。学校でこうやると、あんまり作りたくなるんですよ、電子。趣味じゃなくて、今度、専門になるじゃないですか、こうやって。勉強になるんで、ちょっと面白みが少なくなったというか。作ってるうちはあんまり理論が分からなくて、アンプ作ってるほうがどっちかという楽しくて、理論、理論のほうばかりやって、あんまり面白くない。学校で実験かなんかしてくると、家でも同じようなことをしても、あの時はなんだかなあという感じだったのか。大学1年の時はあんまり……。マージャンもしなかったんです、私。マージャンやって、そんなマー

ジャンなんか、こんな煙のある所なんか嫌だっってやってやめましたね。マージャンも凝ってなかったし。1~2年はちょっと自分でも存在感が薄かったのか、何をやってたのかよく分かんないですね。3年ぐらいから、2年の終わりぐらいの時にはバンド、ギターをやってバンドの連中と一緒に付き合うようになって、ハワイアンバンドっていうのが当時あったんですけど、今はハワイアンってないんですけど、バンドで結構活動してましたね。

Q：それは3年になってから？

西角：2年のその終わりぐらいだったと思いますね。1年の時は何やってたのかな。たぶん、勉強してたと思いますよ、わりと、最初は真面目だったんで。割と成績よかったからね。2年、3年ぐらいはちょっと、成績だいぶ落ちたような気がしますけど。でも、化学だけは成績よかったですね。化学だけはよかったような気がします。褒められたことがありますよ。バンド活動は2年の終わりぐらいからやったんですね。

Q：ウクレレを弾いてたんですか。

西角：ウクレレも弾いて、ギターも弾いて、スチールギターとか。

Q：手品のサークルとかにも入っていたと聞いたことがありますか？

西角：手品は高校時代ですよ。大学入ってから、手品のそういうクラブは入ってなかった。私、個人的趣味でやってたりしてましたけど、見せたりしてやってましたけど。

Q：大学の時もそれを見せたり。

西角：ああ、やってましたね。

Q：余興みたいな。

西角：余興みたいなのでやってました。あれは結構いい勉強になる。手品で半年間ぐらいだけど、いろいろコツを教えてもらったら役に立ちました、あとで。大学の時はバンド活動をやったのは結構ありますよね。

東京生活：秋葉原

Q：ちょっと話は戻るんですけど、東京に出てくる時に楽しみに行ってみようと思った所

はありますか。

西角：秋葉原ですね。

Q：やっぱり秋葉原だ。

西角：秋葉原。今の秋葉原と違って、本当の電子部品が置いてあった。来てみたかったですね。出てくる時に、あそこだけは行ってみたいなって。全然違いますからね、日本橋と規模が違うんで、びっくりしましたから。秋葉原はぜひという。あと、親父が言った神田の古本屋。あの辺はあんまりね、そんなに感動、すごい本があるなぐらいだったけど、秋葉原はすごく感動しましたね。部品が置いてあったり、全然置いてある部品の質とか量が違うんで。

Q：そうだとラジオ会館。

西角：ラジオ会館とラジオデパートとか、ぐらいですかね。ほかにもあったけども、大体そこら辺がメインですよ。

Q：パーツとか。

西角：パーツもあそこだけで、もうびっくりするぐらい、いろんな、何でもそろろうなという。

Q：そうですね、はい。早速、購入して何かを作った記憶とか。

西角：いや、購入して……、そういうのを作ったかな。購入はしない。ただ、見るだけだったような気がしますね。もう、アパートでそういうのを作ったような、あんまり覚えはないんで。見て楽しむというほうだったかもしれないですね。あと、そこにアルバイトしてる友達が、友達がそこでバイトしてたんで、よくそこに行って遊んでましたけど。

Q：あと下宿、借りられたアパートもそこら辺にあったんですか。

西角：アパートは上野毛、世田谷にありました。

Q：日本鋼管の方の家を借りてて、近くに？

西角：ええ、近い、もう歩いて10分ぐらいのそこを借りて。だから、時々遊びに行ったりしてたんですけど。

Q：基本、4～5年間は上野毛から神田の界隈を。

西角：そうですね、ええ。そのとおりです。卒業して1年ぐらいまでそこに住んでましたから、大体それくらいですね、5年ぐらいそこに住んでました。

大学時代の始まり

Q：大学での勉強はどうでしたか。専門性を高めたいと思って行ってみた大学で、電気関係のいろいろな授業を受けて、学んで、どういうことを感じましたか。

西角：ちょうどあの頃は真空管とトランジスタが入り代わりの時代だったんです。私も真空管を習ってるんで、こんなの将来役に立つのかなという気はして、不安はありましたね。それは今でも覚えてます。学校は相変わらず、古い授業を教えているんだけど、世の中はもうトランジスタ、ICまではいかなかったんですけど、トランジスタが、本を見てもそんなんですけど、学校ですっと真空管ばかり、なんでこんなのやらないかやいけないのかなって、ちょっと不安な面はありましたね。そうそう、私、1年の時に結構勉強したんだ。勉強っていうか、夜もテレビの学校って当時あったんですよ。学校ではあんまり、理論的なことは教えても実践はやらないんで、実践のことをやりたいと思って、私、テレビ学校も夜通ってましたよ。学校2つ行ってましたね。昼間大学行って、夜、テレビ学校も行ってました。

親にそんな金、出してもらって、自分でアルバイトもしてなかった。ああ、アルバイトはしてましたね。アルバイトは塾の先生をやってましたね、上野毛で。1年の時、ああ、そうそう、塾の先生やりました。塾の先生やったり、家庭教師もやった覚えありますけど。でも、学校帰って。だから、1年の時は結構勉強で忙しかったかもしれませんね。あまり遊びをしなかったような気がします。そうですね、塾の先生やって、塾は週2～3回ぐらいありましたから、結構忙しかったかもしれません。塾と、家庭教師は3年、2年ぐらいか3年ぐらいの時、家庭教師頼まれてやりましたね。

Q：勉強は2校で行って、塾の先生もやっているから、もう時間もない。

西角：そうですね、時間、ほとんどなかったですね、そういえば。そういうので忙しかったな。あんまり遊びは1年の時はしなかったですね。

大学時代：影響を受けたメディア（テレビ、漫画、映画）

Q：でも、そろそろテレビの時代になったり、映画もまだ上映されていて、そういう時に得た影響とかは何ですか、テレビ番組なり、映画なりっていうのは、その大学時代っていうのはなかったですか。

西角：映画……。

Q：ないですか、非常に印象に残った映画であるとか、漫画であるとか。

西角：テレビ、うち、大学の時はテレビも自分で持ってましたから、「ウルトラセブン」って「ウルトラセブン」の前の「ウルトラ Q」っていうのはよく見てましたね。あの特撮が結構面白くて、「ウルトラ Q」っていう番組はよく見てましたね。

Q：その時代から特撮には興味を持って。

西角：はい、特撮には興味ありましたね。見て、よくできてるなど。今、「ウルトラ Q」見て、ものすごい幼稚なんですけど、あの頃は結構感心して、よくできてるなどと思ってたけど、今見るとちょっとがっかりしますけどね。

Q：映画はどうなんですか。前みたいに映画見たり。

西角：あんまり映画はそれほど見なくなったような気がしましたね。見に行ったような覚えはないかもしれない。「007」シリーズはよく見に行ったんです、そういえば。あの頃、そうそう、「007」が始まったばかりで、「007」はずっとシリーズで見てたような気がしますね。

Q：何に一番興味を持たれて、「007」の中の。

西角：「サンダーボール作戦」っていうのが面白い、何回か見たような覚えですね、「007」。あれもいろんな仕掛けじゃないけど、出てくるじゃないですか、武器みたいな、そういうの、あれが結構楽しかったですよ。

Q：武器ですね。

西角：はい。仕掛けが出てくるような。昔でいう特撮ですよ、どっちかというに近いで

すよね。特撮も結構興味がありましたね。

Q：その背景、理由ってあるんですか、特撮というのは。

西角：どうやってやってるのかなという、ひとつの興味と、自分でもなんかやってみたいなっていう気もありましたよね、ああいうの作ってみたいなって。

Q：将来として、そういうものに携わりたいなっていう気持ちも。

西角：その当時あったかもしれないですね、ああいうのを作ってみたいなと思いました。よく見ると、ひもが見えたりするんですけどね。もうちょっと見えないようにできないかなとか。そうそう、そうそう、そういうちょっと批判しながらね。ちょっと今回のはうまくできてないなとか思いながら。今、見ると、もっと幼稚に見えたけど、その当時は結構びっくりするようには見えたんですよね。

Q：もう漫画は見なくなったんですか。

西角：漫画は。

Q：アニメーションとかも見ないですか。

西角：漫画は、うん、漫画もあんまり見なかったですね。テレビでは昔、「オバケのQ太郎」とかやってましたけど、ああいうのは子ども番組はよく見てましたね、なぜか。子どもの見るような、なぜか知らないけど見てましたね。「オバケのQ太郎」っての、やってましたね。

東京オリンピック

Q：だいぶ話が変わりますが、当時、東京オリンピックですよ。

西角：そうです、オリンピックでしたね。

Q：1964年でしたから、大学入った年がオリンピックですか。

西角：入った年かもしれないですね。

Q：そうすると、東京もわさわさしてたんですか。

西角：してましたね。してました、してました。オリンピック自体は見に行かなかったですけど、テレビでは、テレビで見てたと思います、テレビはありましたからね。オリンピックですね、そういえば。そうそう、そうそう。だから、女子バレーが優勝した、あれはテレビでリアルタイムで見た覚えありますね。金メダル取ったのね、あれはテレビでやったのを見ました。そういう時代でしたね。高度成長期のちょっと走りぐらいですかね。

大学時代：ゼミ、就職

Q：3年生からは研究室とかゼミに入るんですかね、大学。

西角：そうですね。そういうゼミみたいなのはなかったですよ、あの時は。実験のグループがあって。すごく興味のある人は大学の先生の助手じゃないけど、そういうとこ、先生の部屋に入っているいろいろ仕事を手伝ったり、研究所を手伝ったりしてるやつもいたけども、私はそういう所に上がらなかったですね。ゼミみたいな、そういうのもなかったです。

Q：3年生になってくると、そろそろ就職とか意識を始めたかして。

西角：3年になると……、4年ぐらいですね、就職、4年。4年になると就職ですから、3年ぐらいからありましたね、そういえば。なんか就職、求人がいっぱいあったんで、それほど困るってほうではなかったですね、就職に。

Q：どのような候補というか、就職先を選ぶ判断基準を持っていたとか、自分の学問的な興味・関心なのか、もう少し趣味のほうなのか、どういうふうにだんだん選んでいったんですか。

西角：大手の電気会社へ行きたかったですね、最初は。

Q：それは高校の時から夢でしたか。

西角：いや、高校じゃないですね。ソニーっていうのは昔から憧れてましたから、トランジスタだったんで。そんなとこは行けないだろうなと思ってたんで、高校の時はですね。大学入って、何とか行ってみたい、そういう大手の所にですね。ほかの人もみんな、そういう所に、求人も来てましたし、就職してみたいなって気にはやっぱりなりましたね。実際、ソニー、私、受けたんですけども。

Q：大阪に戻られるというあれはなかったんですか、もう、もうこの時には。

西角：そうですね。親から言われて、どうなったんだって言われたけども、もう親もあんまり、もう諦めたのか、そんなしつこく言わなかったですね。その時はたぶん「東京でちょっと仕事して、1~2年したら戻るから」ぐらい言ったような気がしますけどね。「向こうで勉強、向こうの仕事をやって、それから、いずれ戻るから」ということを言って、言い逃れしたのかもしれない。親としては多分諦めてたと思いますよね、多分帰ってこないなって。

Q：大阪だから松下電器とか、地元ですよ。

西角：そうですね。それは親としてもこっちへ来てもらえばいいですけどね。

Q：松下とかサンヨーとか、当時はいっぱいありましたよね。

西角：松下はたぶんあったと思いますよ。東京より大阪のほうがあったでしょうね、松下も。大体、東京中心の会社が多かったですよね、ソニーとか、日本電気とか、そういう所は。今のNTTですね、日本電電公社とかそういうところが求人。結構、求人は来てましたね。私、ソニー受けたんですけど、最初は。落ちましたけどね。

就職：音響メーカー

Q：最初は音響メーカーだったんですよ。

西角：ええ、音響メーカーなんですけど、どっちかというとな音響関係、電子関係の会社に行きたいなと思って。主に技術、いろいろ職種として営業とか技術があるんですけども、技術者になりたかったんで、技術者の募集のほうに行きましたね。私の友達なんか、みんな営業のほうね、営業行ってるんですけど、私は技術者のほうを希望してたんで。

Q：娯楽産業系の求人とかあってあったんですか。

西角：いや、気が付かない、なかったと思いますね。あったのかもしれませんが、そんなのあっても多分行かなかったと思いますよ、私。なんちゅうのやって。

Q：多分、その頃は海のものとも山のものともわからない。

西角：そうそう、そうそう。

Q：第3次産業というのはですよね。

西角：そうですね。

Q：音響メーカーの名前ってどういう会社になりますか。

西角：私、行ったところ？ タクトっていう会社ですよ。もう、今、つぶれましたけどね。

Q：当時はどういう、何が主力っていう会社だったんですか。

西角：デンタクという……デンタクじゃない、電蓄って言ってたんだけど、いわゆるプレイヤーがあって、携帯用のステレオですね。

Q：携帯のステレオ。

西角：それで伸びた会社だったんです。

Q：入社されたのはいつなんですか。

西角：それは1900……、何年ですか、昭和でいくと42年ですね。

Q：昭和42年、1967年です。

西角：1967年ですかね。ソニーがちょっとうまくいかなかったんで、思い切って、大手の会社よりも小さい会社のほうがいいのかなというふうに思ったんで、中堅ぐらいの会社がいいかなと思って、大手はいいやと思って。

Q：規模は何人ぐらいの？

西角：400人ぐらいいたんじゃないですかね。もうちょっといたかもしれません。あっちこっちに工場があって、一応、今言った携帯のプレイヤーは、特許じゃないんでしょうけど、独占的にやって、主にアメリカのGEとかその辺へ輸出してたというか。すごい景気のいい会社だったんで。

Q：場所はどちらにあったんですか。

西角：場所はね、市はね、何市だ、調布じゃないな、あれはね、稲城市だよ、稲城市じゃない。場所は東京なんですけど、調布市だったかもしれないですね。矢野口っていう所、電車で行くと矢野口だったんですけどね。市でいくと調布市だったかな。

Q：矢野口だと稲城市ですね、多分。

西角：稲城か調布かどっちかで、あの辺ぎりぎり、川は覚えてたんで、東京のような気がしましたよ、東京、東京都だと思ったような気がしたんで。ちょっと住所まで忘れちゃったけど。本社は成城にあるんですけど、工場はそこにありまして。私が配属されたのがここだったんですね。

音響メーカー：オーディオに関わる仕事

Q：オーディオをやりたいっていうのは、前からわりとスピーカーとかアンプを作られていたところから来てるんですか。

西角：はい、はい。オーディオの会社だったんで、そこでやる仕事があるかなと思って、設計の仕事がですね。

Q：設計というのは、自分で作ったり手を掛けて設計する技術職とかが。

西角：その会社ですか。

Q：ご希望として。

西角：そうそう、希望としてはやっぱり自分で設計して作ってみたいというのは、結構強かったんですよね。それでかもしれないけど。会社入って1年足らずで挫折しましたからね。

Q：具体的に何を作ってみたかったんですかね、スピーカーになるんですか。学生の時に就職を考える時に、自分で設計をして作りたいと、その作るモノとしては。

西角：作るのは、当時は電蓄っていうやつ、プレイヤーですね、携帯用のレコードプレイ

ヤーだったんですけど。それじゃなくて、カセットテープレコーダーっていうのが出始めた頃だったんです。8トラックかなんかの、昔でいう車用の8トラックってあったんですけどね。そういうのが出始めた頃で、まだカセットのはしりだったんです。私はどっちかというと、レコードプレイヤーじゃなくて、将来はそっちのほうにいくんじゃないかなと思って、そういう設計をしてみたいなと思ってたんですけど。どうも入ったその会社は、そんなの関係なしでレコード、まだ全盛ですからね、そんなもんじゃないんで、先は読めなかったと思います。そんなのを話したんだけど、相手にしてもらえなくて。私もなかなか設計に入れてもらえなくて、こいつ変なことばかり言ってるなと思われたのかどうか知らないけど。いわゆる修理だとか、そんなような仕事が結構よく続いて、最終的には買ってという、モノを買ったりする、そっちに行ってくれないかっていうことで、ああ、もうこれは駄目だと思って、で、辞めたんですね。

Q：そこで社会人になって学んだこととは何だったんですか。そういう、いろいろなことがあって。

西角：思ったようなこと、仕事できないんだなっていうのは、当時ありましたよね。

Q：自分のやりたいことをしたいと。

西角：ちょっと我慢したほうだったんだけど、1年近くそういう設計で。私と同期で入った人間も、みんな設計に行っていないんですよ、わりと。同じような仕事をしてるんで、あれ、この会社、駄目かなと思って。売上もあったし、大きくはなってるんですけど、新しい話とかあんまり聞いてもらえないし、私の同期っていうやつも、みんな設計に入ったやつもないので、あの会社それほどあんまり伸びないのかなって、ちょっとそう感じましたね。案の定、私が辞めて3年後ぐらいしたら、つぶれましたけど。アメリカの受注が急に下がって、多分、私、これは「たれば」ですけど、カセットかなんかやってれば、新しいことをやってれば次に伸びたんでしょけど、ずっと電気のレコードプレイヤーばかりやってたんで、技術のノウハウなくてついていけなかったんでしょね。それからカセットの時代になりましたから、あのあと。

Q：当時の大学で電気工学を勉強した人にとって、一番やってみたい仕事、西角さんがというよりも、みんながやってみたいと思っていたような仕事っていうのも、レコードからカセットに行く、そういうところの設計というのがわりとポピュラーだったんですかね。

西角：あの頃はやっぱりね。

Q：何が一番花形というか。

西角：花形というのは通信機ですね。我々は大学では電気通信科ですから、いわゆる交換器、当時、電電公社って、電話の交換器の設計とか、あとテレビですね。あの頃はテレビが花形でしたから、私もテレビの学校へ行ってたぐらいだから、これからテレビの時代という、そんな時代ですよ。テレビから見るっていう感じで。テレビのそういう新しいビジョンっていうんですかね、それはまだカラーテレビも出たばかりだったんで、そういうテレビに憧れて、みんなは、友達はみんな憧れてましたよね。私も一応テレビに憧れてたんですけども、どっちかというと言響のほうがいいかな、好きでやってたんでオーディオがいいかなって思ったんですよ。テレビの学校に1年間行ってたんですけどね。一応テレビの理論は全部分かったし、自分でも勉強はしてたんですけどね。

専門学校

Q：最初の大学1年のあの時代に。

西角：ええ、一応テレビの学校ね、恵比須の、今でもまだあるのかな、前身はあるようなことを言ってた。電子工学院っていったかな、なんかそんな。

Q：電子工学院？

西角：その当時いっぱいあったじゃないですか、電子工学、東京電子工学院、なんか似たような、ちょっと名前忘れちゃったけど。話聞いたら、それが新宿かなんかに行って、あとになってその先生と話した時、「多分残ってますよ」とか言われたんですね。東京電子工学院っていったかな。まだ、今でもありますよ、新宿のところです、あれは。

Q：いわゆる専門学校ですか。

西角：専門学校です、大学じゃないです。夜間の。今、考えたら、2つもよく行ったなと思って。ただ、夜はテレビの学校ですから、そんな難しい理論は言わないですよ。難しい理論より、修理とか実践の勉強が多かったです。テレビの機械を置いて、ここはこうですって。大学いつも教えないじゃないですか、そんなのは、テレビの修理だとか、そういう理論っていうのは。真空管の理論ばかり。大学ってね、今、考えると、あんなんで役に立つのかなと思いつつ勉強してましたよね。トランジスタでも、トランジスタの回路を教えないんですよ、なかなか。トランジスタのできる物理の、電子の動きとか、エネルギータイプとか、あんなの勉強したって、トランジスタを発明する人か、そうしたい人のレ

ベルの勉強ばかり、多分やってると思うですよ。物理の勉強ですね。そんなの。実際の回路でここをどういう具合にするというような、そういうような勉強をあんまり大学でも。今はどうか知りませんがね。何でかなと思って。やっぱり、そういうのはちょっと実践でやってくれていうことなのかどうか分かりませんが。そういう勉強をしてなかった。だから、大学でやったのはそんなに社会に出て役に立ってなかったですね。

Q：大学に行きながら専門学校も行くっていうのは、わりと多くの方がやられていたんですか。

西角：いや、ほとんどやってないと思いますよ、私ぐらいなものじゃないですか。なんで学校 2 つも行くのって、友達にも言われた覚えあるし。学校だって、なかなか専門的なのは教えてくれないんで、そういうのは。

Q：それはやっぱり将来を見据えた上で、それが必要だって感じたということですか。

西角：というのもあるし、私の友人の知り合いに電気屋がいたんで、大阪で。そこで高校の時にアルバイトをして、テレビの修理のアルバイトをしてたんですよ。大学行った時もそうだったんですけど、テレビの修理して。なかなか、でも、修理できないから、かばん持ちじゃないけど、工具箱持って、専門の人についていくんだけど、ああ、自分でも修理してみたいなというような、そういう気持ちもあって学校へ行ったんです。でも、最後のほうは自分で修理してましたけどね、行って。壊れる所は大体決まっているような、このメーカーはここが壊れやすいっていうのが分かってくると、そんな難しい問題じゃない、理論も関係ないなと思いましたけどね。

テレビの修理：図面、回路図

Q：テレビも修理できるぐらいに。

西角：できましたね。あれはどこだったかな、東芝か、東芝の専門店だったか。だから、そこへ行くと、もうこのテレビの弱点がいっぱいあるわけですよ。テレビ映らないよってパッと行くと、大体、4ヶ所ぐらいのポイントがあって、そのうちのどれかが当てはまるんですよ。だから、真空管換えて、あ、違うなと思ったら、こっちの真空管換えたら、ああ、映りましたって。向こうの人は「あ、すごいですね！」って言うけど、こっちはいろいろデータベースでもう調べてるんで、そんなに理論じゃなくて。夏休みに大阪へ帰った時は、1ヶ月ぐらいテレビの修理のアルバイトしてましたね。

Q：自分でテレビの修理をやる人として、大阪でやりながら、戻ったら勉強するという。

西角：まあ、そうですね。理論は東京でやったんですけど。だから、そのテレビ修理っていうのはあんまり理論って関係なく。でも、図面がありますから、回路図がありますから、回路図見てやりますから。実践はそっちでやったから、結構、勉強になったと思いますね。

Q：大学で図面を引いたりとか、そういう勉強は。

西角：そんな勉強は、図面はだからやらないですよ、設計までは。そこまでのあれは…。だからさっき言ったように、物理とかそういう、電気じゃなくて物性のほうですよ。あんまり、あれ、役に立たないと思いますよ。今でもああいう勉強してるのか分かりませんが。トランジスタを作る課程のそういう物理、原理みたいなものを勉強して。実際、トランジスタを組み合わせて音を出すという勉強はあまり大学ではしてなかったですね。しかも、大学の時は真空管ですからね。真空管はこれからの時代じゃないだろうって、その時、私も感じましたけど。ちょうど大学のほうも、それ悩んでる時代だと思いますよ。もう真空管、そろそろやめなきゃいけないなという。私、大学で学んだことは世の中に出て、あんまり役に立たなかったですね。ただ、デジタル回路っていうのをやったんです、大学で。それは今のゲームやる時、そのデジタル回路だけは役に立ちました。だから、電子というよりもデジタル回路の勉強は役に立ちました。唯一それだけです、社会に出て役に立ったのは。

Q：ただ、それはどちらかというと、音響の会社ではなくて、そのあとのパシフィック工業で。

西角：そうそう、そうそう。

Q：その時に役に立ったと。

西角：ええ。

音響メーカーの強み弱み

Q：音響の会社にいた時は、結局どういった技術の主力で受け入れられて、どういった技術だと NG を得たとか、そんな感じは？ イメージとして。結局、購買に移らなきゃいけないなかった。

西角：そうですね。

Q：じゃあ、何が主力部隊として技術を重宝されて、経営的にも重宝されたという感じなんですか。

西角：その会社ですか。

Q：はい、その前の。

西角：技術部という部署はありましたよ、開発。それはもう先輩が居て。ただ、そこはあんまり設計にはそれほど力を入れてなかったんですよ。回路 1 個決まりますとね、あとはそれをベースにして、要はデザインを変えて。それほど技術的な革新とか進歩ない会社なんです。そういうのが分かったんです。この会社はもう駄目だなというのが、もう途中で感じましたね。私が言ったように、同期の人間も技術に入らないし、僕はちょっとおかしんじゃないかなと。いや、最初見た時はすごくいいような会社に見えたんですよ、いろいろ話聞いたり、調べたら、これから伸びていく会社だったんで、どんどん、どんどん伸びると。実際、伸びてる時だったんですけど。ただ、伸びてるのはアメリカから注文がいっぱい来て、会社の経営自体が伸びたので、技術が伸びてるわけじゃなかったんです。それがちょっと中に入って分かったんで、そろそろ駄目かな、辞めたほうがいいかなと思った時に、別の部署に行ってくれと言われたから、これはいいチャンスだなと思って、で、辞めたんですけどね。

Q：それは経営者が全く技術に対して理解を示そうとしなかったのか、それとも技術のトップが実は、どんな状況だったんですか。

西角：経営者だと思いますね。どっちかというと、もうかるほうが優先だという考えだったんですね。私がカセットの話を提案したのは、社長宛に書いたか、結構トップのほうにいろいろアイデア出したんですけど、全然受け入れてもらえなかったですよ。見てもくれなかったのかもしれないけど、直属の上司に聞いたら、「おまえ、駄目だったよ、あれ、ああいう企画は」って言われたから、ああ、そうですかと。そうでしょうね、レコードプレイヤー全盛になる時に、別の技術の話を持ってっても、たぶん聞いてくれないと思いますよ。それで儲かってるのに、なんでそんな先の投資って、そこまで考えなかったと思う。案の定、さっき言ったように 3 年ぐらいしてから、その会社がアメリカの需要がなくなって、注文が減ったからそのまま終わっちゃいましたね。

音響メーカーを辞めた理由

Q：そこで購買に行くとなったから、そこを辞めようかと。

西角：そうです。それまで一応修理だとか、技術的なことはやらせてもらってたんですけど、それもできなくなったので辞めました。入社して1年ぐらいですね。

Q：辞めると決める前に、次の当てがあったわけじゃないんですよね。

西角：ないですよ。

Q：辞めるといふのを決めたわけですね。

西角：そう、辞めるといふのが先だったんでね。今だったら決めて辞めるんでしょうけど、そんなようなネットワークもないし、ただ、気持ちだけで辞めるって。家でそうやって言うと、「じゃあ、帰ってこい」と言われるから、それは言わずに自分だけの中で決めてっていう感じですね。

再就職：パシフィック工業

Q：再就職の活動をした結果、パシフィック工業に入ったと。

西角：そうです。その頃、結構、求人、仕事は、職場あったんで、別の所に応募しました。

Q：最終的にパシフィック工業を決めた理由って何だったんですか。決定打っていうか。

西角：決定打は、サイバネットっていう会社がありまして、サイバネット工業、もう今はなくなりましたが、京セラに吸収されて。そこは私が住んでる所の、アパートに住んでたんですけど、住んでるアパートの裏にあったと思うけど、サイバネット工業っていうのがありまして、そこはアメリカの市民バンドっていうのが当時ありまして。もう今、規制がかかってなくなりましたが。それやってて伸びてる会社だったんです。そこが、ボーナスが桁違いにいいんで、家も近いし、そこが募集をしてたんですよ。面接受けて、中途採用だから試験はなかった、あったかな、試験あって面接を受けて、それで結果待ちというような感じだったんですけど。本当はほぼ決まりかなという、自分ではあったんですよ。

その日じゃないんですけど、次の日ぐらいか、溝の口っていう駅があるんですけど、大

井町線に。そこでタクト時代の先輩なんですけど、荒井さんっていう人です。その人は技術にいた人なんですよ、どっちかという、技術部の中の設計をやった人。その人も辞めて、何かで辞めたんですよね、その人も。私よりも先に辞めて、その人と会ったんですよ。その荒井さんという人はタクトを辞めて、パシフィック工業に入っていたんですね。「おまえ、どうしてるの？」っていうことで、「今ちょっと就職活動していて、昨日も面接して、一応ほぼ決まりそうなんで」なんて言ってまして。「じゃあ、うちへ来ないか」「一緒にまたやらないか」という話になったんだけど、「いや、でも」とって、聞いたら、しかもおもちゃみたいな、要はおもちゃの会社っていうんですよ、彼は。はっきり言わないけど、「何やってるんですか」「いや、おもちゃみたいなのを作ってる会社なんですけど、面白いよ」というので「一緒にやらないか」とって。私もその荒井さんっていうのはいろいろ相談に乗ってもらったりして。その前まで辞めようかなと思った時もあったかもしれないけど、「まあ、ちょっともう一度頑張れよ」とって言われて、タクトの時にね、頑張ったようなので、お酒飲み連れてってもらったり、よく面倒見てもらったり。その人が先に辞めちゃったんで、それもあって私も辞める気になったと思うんですけど。

その人と偶然会って、「おもちゃの会社行こうよ」とって言われても「ちょっと」とっていう話で。久しぶりだから、会って。どっか駅の近くの喫茶店で話したと思うんですよ。駅の中での立ち話じゃなくて、どっか喫茶店に入って話聞いたら。また、結構、熱っぽく語るんですよ。少々口の達者な人だったんで。いろいろ聞いてると、おもちゃ、本当にこういうおもちゃかな、玩具かなと思ったら、そうじゃなくて、ゲーム機だったんだけど。本人はゲーム機って分かんないと思うからって。「ゲーム機って分かる？」っていうから「いや、ちょっと分かんないんだけど」とって言ったら、デパートの屋上行ったら、「こういう、知らない？ ハンドル付いてドライブゲームっていうの」とって言ったんで、それで「それは知ってるよ」とって。私、高校の頃、よく大阪の高島屋の屋上で結構はまったんですよ、あれだけは。帰りよくその辺に寄って、ジュークボックスもそうだけど、デパートの屋上でゲームして。結構、いい地点まで行って。最後まで行くのは大変なんです、難しいんです、1カ所あって。最後までクリアを何回もしてるんで、ちょっと自信があって。「俺、作ってるのはあれじゃないんだけど、まあ、あんなようなゲーム機だ」という、あんなような機械だっというので、ちょっとスイッチが入って。そうなんだ、面白そうだな。作るのって電気の技術はあまり要らないよって、機械の、モノを設計したりする、モノを作ったりするほうが大変だよと言われて、それも面白そうだなという話で。2時間ぐらい話した覚えがありますけどね。彼もうまかった、「ぜひ、やれよ、やれよ」「ちょっと1回、人事部長に会ってみろよ」とか言われて、分かりましたって。もちろん私もふらふらしてる時だから、そういう心強い先輩にわーっと言われると、ついていくというか、人事部長に会ってみようかと思って、人事部長に会う約束をしたんですね。結構早くて、2日ぐらいか3日ぐらいあとにパシフィックに行ったと思いますよ。綱島のどこにあったんですけどね。

Q：サイバネットでしたか、そっちのほうが給料は高いんですね。

西角：給料より、ボーナスがすごい。ボーナスが1年で7ヶ月か6ヶ月か、なんかそんなような。当時はすごかったんです、とにかく桁違いによかったんです。それを受けて、最終的に採用通知が来たのかちょっと分かんないけど、多分採用だったと思いますが、ただ私のほうで「ほかに決まりましたから」ってお断りした覚えはありますね、電話で、電話かかってきて。

再就職の決め手：荒井さん

Q：何が決め手だったんですか、このパシフィックに行くのは、サイバネット工業をやめて。

西角：その荒井さんっていう人がいた、先輩がいると、ちょっと心強くなっているのと、関西精機もさっき言ったゲームなんですけど、そういうのを作ってるっていうのがあって、ああ、そういうのもいいかなって、なんかその時そう思ったんですね、ゲームってよく分かんないけど、そういうもん作ってみたいなという気はしましたね。「おまえ、来たら、今度必ず設計じゃないけど、モノ作るような環境にしてやるから」と「配属してやるから」という話もあったんで、じゃあ、やってみようかなと思って。

Q：いくつぐらい上の先輩なんですか。

西角：1つ上ですね。1つ上で、彼はタクト時代は設計チームに入ってたんですね。最近ちょっと会ってないからどうなったか分かんないですけど。彼は後でパシフィック辞めちゃったんですけどね。

Q：そうなんですか。

西角：でも、かなりいました、あとからですね。5~6年ぐらいはいたんじゃないですかね、私が入ってから5~6年は。

Q：そこで荒井さん自身は、どんなゲームのメカトロニクスとかをやっていたのですか。

西角：彼も電子屋だった、電気のほうだったんですけど。彼が入った時はゲームの設計じゃなくて、生産技術っていいましてね、開発、プロトタイプを量産に乗せるための設計ですよ。一番そこが本当は大事なことなんですけど。量産設計みたいな所に彼は入りまし

たよね。そこにおまえも一緒に、仕事するから、させるようにしてやるからっていう約束をして、実際はそこに行けなかったですけどね。そういうようなあれで、人事部長と話ししてくれって。人事部長はね、その時、社内の人からの話だったから、ぜひ来てくれっていう話でもないし、来たいなら来たらってというような感じだった。そのあともそうだけど、そういう性格。悪い人じゃないけど、性格はそうだったですよ。その荒井さんっていう人だけは、「せっかく、うちに来たんだから、お前、ちょっと」と誘い込まれて、ついつい入りましたね。

配属：生産

Q：で、配属されたのは設計？

西角：設計じゃないです。生産に入って、やっぱり生産に入って。いや、最初やっぱりね、ちょっといろいろ勉強してもらわなきゃとか何とか。その人事部長は結構冷めた人なんでね、「荒井がね、そうやって設計って言ったって、そんなの勝手に、要は社員が決めるわけじゃない、会社が決めるんだ」とか言って、「まずは会社入ったら、モノ作りからっていうか、現場からやってもらうから」って、組み立てですよ、こういう。

Q：組み立てですか。

西角：組み立て。パートの女性と交じって、組み立てから、まず入って、生産部に入って、製造部か、製造部に入って、組み立てを半年ぐらい。本当は3ヶ月って約束だった、3ヶ月たったら技術に戻してやるというような、まあ、それは口約束みたいなやつ。3ヶ月たって、現場にいますよね。そうすると、結構慣れてくるじゃないですか、もうベテランになるんですよ。そうすると、なかなか3ヶ月たっても現場が離さないですからね、逆に。「いや、もうちょっと」って、結局ね、6ヶ月ぐらいやりましたかね。

Q：どんなゲームをその時は製造してたんですか。

西角：それはね、メカゲームで、「ペリスコープ」っていうゲームがありまして。それはセガにも同じ名前がある、タイトルにもあったんですよ、「ペリスコープ」、潜水艦で壊すやつ。その部品の加工、加工っていうか組み立てですよ。それ、あとキャビネットにボルト、ネジ留めたり、機械を付けたり。製造部ですから、組み立ての所ですね。そういう仕事を3ヶ月ぐらいして。

Q：そのあと、設計のほうに回る？

西角：設計に行けなかったんですよ、それが。設計に行けるっていう話で、6ヶ月たって設計にしろって言ったら、「いや、もうちょっとやってもらいたいことがあるんだから」といって、製品検査ありますよね、製品検査を半年ぐらいやりましたかね。

Q：じゃあ、1年間ぐらいは別の部署で。

西角：1年弱いましたね。

生産、製品検査から学んだこと

Q：それを経て学んだことって何ですか、最終的に。

西角：もう、それはものすごくよかったですね。まず、組み立てでやって、モノ作りの、こういうのを作れば組み立てやすいとかね。設計する人っていうのは自分の考えで作るから、図面どおりやって、ちゃんとモノはできるんですけど、加工しにくいとか、組み立てる人の身にはなっていないから、非常にやりにくい設計になるんですね。私の場合は組み立て、製品検査を経験しているんで、組み立ての外注さんとか、部品を作る人にはものすごく喜ばれましたよ。「西角さんの作ってる図面は、ものすごく組み立てやすいし、分かりやすい」と、そういうのがそこでもものすごい勉強になりました。組み立てやって、ああ、こういうふうにすれば。例えば、ネジをこういう具合にいくんだけど、こっちからやれば、次はここやりやすいとか、そういう順番、組み立てる順番をきちんと考えて設計できるので、それはものすごい役に立ちましたね。検査やって、検査も4、5ヶ月ぐらいやったんですけど。検査やってたら、あ、ここは壊れやすいとか、例えば、モノを交換する時、部品交換する時に変な設計をすると、それこそ全部ばらさないと、全部取り外して、前のフロントパネル外して、ガラスも全部外して、部品1個取るだけにしては、ものすごい時間がかかるんだけど、ここが壊れやすいなと思ったら、ネジ1つでパタンとふた開けたら、パッと取れるようにするとか、そういうふうにすれば、後々は非常に楽だなという、そういうテクニックは生まれましたね。

だから、私が設計したやつは、外注さんでは、組み立て屋さんとか、非常にサービスしやすいとか、営業の人にも言われましたけど、それはすごく心掛けてやりましたね。だから、交換しやすい所は、取りあえずすぐ交換しやすいようにして。設計する人がちゃんとしないと、本当さっき言ったように、この部品を交換するのに、全部現地でばらして1個取る。これ1個取るのにこんなに時間かかるのかというような設計をする人もいますですよ。それはしなくて、そう考えて設計するようにはなりましたね。その1年幾らは無駄にならなかったなと思って。私も新入社員来たら、必ずそういう仕事をさせればいいか

なと思いましたが。今はね、入ってくると、すぐパソコンもらって、もう全部実践で入りますけど。最初の下積みの生活はよかったかなというふうに。

「スカイファイター」：生産技術から開発へ

Q：西角さんが最初に作ったゲームは1970年の「スカイファイター」ですね。

西角：そうですね。それは開発じゃなくて、生産技術。

Q：生産技術に入ったんですって。

西角：そうです、生産技術、開発じゃないんで。そこから開発に。生産技術に、でも半年ぐらいいたんですかね。

Q：「スカイファイター」は開発じゃなくて生産技術として？

西角：いや、開発。生産技術から開発へ移ってからですね。本社から部長が来ましてね。どうも私、そのパシフィックの上層部にあんまり好かれてなかった、途中で入ったからか何かしら、好かれてなかったんでね。なかなか、そういうのもあったのかどうか分からないけど、なかなか思ったような仕事できなかつたんですけど。本社のほうから、松平って人かな、開発部長が来ましてね。

Q：松平さん？

西角：ええ、開発部長が来まして、本社から来たんですよ、本社っていうか、タイトーから来たんですよ。開発部長が来て、その人が話して気に入ったのか、「おまえ、ちょっと設計やれ」と、一言で設計に来れたんですよ。

Q：いきなり、子会社から本社に？

西角：いや、その人はパシフィックへ来たんですよ。タイトーからパシフィックに移ってきたんですよ、本社からですね。その人は技術屋さんですね。その人は技術屋さんで、その人と何かで話したんでしょうね。「おまえは、もう明日からかどうかわかんけど、ちょっとうちでやってくれ。開発に来てくれ」、で、いきなり開発に、開発に拾われたんです。

Q：それは勤続してから何年？ 1年ちょっと？

西角：どのぐらいですかね、1年半ぐらいですかね。「スカイファイター」って何年ですかね、1971年だった？

Q：1970年発売って書いてある。

西角：68年に入ったから、まあ、1年3ヶ月か、1年半ぐらい、うろうろしたんですかね、うろうろっておかしいけど、回り道したかもしれませんね。70年になってます？

Q：はい、一応、発売は1970年って書いてあります。

西角：たぶん、私の場合だと1年弱ぐらい、組み立てと検査を。検査、結構長かったような気がしましたね。

Q：検査が1年ぐらいだと。

西角：4、5ヶ月ぐらいやったと思いますね。クレーンってあったんですけど、当時も。今と違って小さな、1人用のクレーンなんですけどね。そんなの毎日検査してるから、大体80%ぐらいの確率で景品が取れる。街へ行ってやりませんでしたけど、大体、取れるんですよ。確率が100%まではいかないけど、取り方が。毎日やってますからね、検査を。

Q：じゃあ、景品取りの王者みたいになって。

西角：そうそう。ゲームも毎日やってるんで、当時のゲーム、大したことないですけどね。毎日検査してるんで、朝から晩まで、結構、腕を上げた。

荒井さん：誘った理由、仕事関係、パシフィックでの仕事

Q：ちょっと話を戻しまして。パシフィックには荒井さんが誘ってくれたというお話でしたよね？

西角：はい。

Q：荒井さんは西角さんの何を見て、そんなに強く誘ってくれたんだと思われましたか。

西角：まあ、1人でいてさみしかったんで、前も一緒にやってたんで、仲良かったんで、や

ろうというぐらいに誘ったんで。特に私が好きだろうから来てくれっていうあれはない、そんな話ではなかったですよ。ただ、面白いものを作ってるよという話は聞きましたけど。「ぜひ。おまえには向いてる」とか、そんなような話はなかったと思いますよ。

Q：そうなんですね。そもそも、タクトにはカセットテープレコーダーの設計をしたくて行かれるわけですよ。

西角：元々は、レコードプレイヤーやラジオなどの設計をやりたかったんですけど、行って、途中で提案したんですけどね。

Q：元々は電子部品の設計をしないと。

西角：はい、はい。

Q：それからまた違う所に行くわけですよ、パシフィック工業に行くとか。それに対する、前はやりたかったものがあつたのに、ということはないんですね。

西角：そうなんですね、そういう、電子回路の設計には特にこだわらなくなっちゃったんですね。だから、サイバネットはボーナスには魅力があつたけど、どうしても行きたいという会社じゃなかったですし、荒井さんが「来たら？面白いものを作ってるよ」という話で行ったと思うんですよ。

Q：荒井さんとタクトでは一緒に仕事、部署は違ったんですか。

西角：部署は違います。彼は設計ですから、私は製造のほう、生産技術みたいな修理だとか、どちらかという製造部門でしたよね。違うんだけど、なぜか息が合ったのか、話したり、食事に行ったりしてましたね、1年先輩ですけど。弟みたいにかわいがってもらったっていう形なんですよ。本人もパシフィック行って、1人でつまんなかったから、「おまえ、来いよ」というレベルだったと思いますよ。確か、パシフィックもそんなに給料悪くなかったんですよ、そうなんですよ。ボーナスは分かんないけど、給料はそんなに悪くなかったんですよ。だから、入ったいきさつはよく分かんないんだけど、上層部にあんまり好かれなくて、人事部長もそうだけど、もうちょっと歓迎してくれるのかなと思ったら、結構冷めてて、いや、来たいなら来てもいいよぐらいの、無理にとは言わないというぐらいの感じだったので、初めがっかりしたんですけどね。

Q：荒井さんとは結局一緒にお仕事をする立場になったんですか。

西角：その生産技術の時は1年もいない、半年ぐらいですかね。

Q：一緒に。

西角：一緒にやってたのは、半年ぐらいですね。生産技術で一緒にやったのは。

Q：その時は同僚、それとも上司ですか。

西角：上司ですね。上司って完全に役職はあるわけじゃないけど、彼の下で働いてたっていうか、指示で働いてる。彼も事務職行っちゃうんですよ、そのあと、3ヶ月ぐらいで。私は開発部門です。彼は事務職にそれほど抵抗はなかったみたいなんで、そのあとずーっと事務職になりましたね。

Q：パシフィックの事務職で。

西角：ええ、事務職、どうしてかは知らないけど事務職。彼も才能はないと思ったのかどうか知らないけど、事務職が好きだったから、事務職でしたね。

Q：当時のパシフィック工業に電子工学を専門とされている方が行くっていうのは、わりと多かったんですか、それともそんなに、珍しいことなんですか。

西角：いなかったですね、ほとんどいなかったと思いますよ。荒井さんが初めてじゃないかな、荒井さんが初めてか、その前に1人いました、電子工学の人がね。ほとんど。あまり電子工学って関係ないですよ、大体。機械を作ってるのと、あと、さっき言ったように、制御はリレーなんですよ。制御は真空管とかトランジスタなんか使わなくて、リレーでやってるので、あまり電子の専門家っていうのは要らないという。機械を作るような、そういう町工場のおっちゃんみたいなのが、そういう器用な人が一番よかったのかもしれないですね。

Q：そこだけ聞くと、随分な変化だなど、西角さんが。

西角：そう思いますね、私もそう思いますよね。なぜか分かんないけど。人柄で入ったような、荒井さんのそういう人柄っていうか、ぜひと言われて入って。荒井さんはぜひと言ったんだけど、上層部はあんまり、ちょっとギャップはあったんですけど。でも、彼がいるから一緒についていこうかなと思った。でも、その彼も事務職行って、もうタイトーの

本社に行くんですけどね、最終的に。でも、そこも彼は事務職でしたね。結局、事務職で終わりましたね。取っ掛かりは彼なんですよ。

Q：彼は事務職というのは経理とか？

西角：経理、最終的には総務だったかもしれませんが、総務の仕事をやったかもしれませんね。パシフィックにいた時は経理関係みたいな感じですね。なぜかは知らんけど、技術を急に捨てたというか、私もびっくりしたんですけど。なんで事務職をやるんだろうって。

Q：高島屋で遊ばれたという経験も。

西角：はい、関西精機の。

Q：パシフィック工業に入社する時は、ずいぶん重要な役割だったんですかね。

西角：重要になると思いますよ。それは今でも覚えてますから。関西精機っていうんですけど、タイトーじゃないです。「ミニドライブ」っていったかな、名前は。今でも似たようなやつがあると思うんですけど、車がコースの上をチリチリチリっと走っていくやつなんです。それはデパートの屋上だと子ども向けですよ。でも、高校生はみんなそういうふうにレベルが幼稚だったんですね。高校生はみんな遊ぶところないから、ゲームセンターあったんですけど、なかなか行けないから、そういう上で子どものような遊びを一緒にしてたんですね。私もわりにお金つぎ込んで、最後のあれが、難関が1つあって、そこをクリアしないと。うまくできてるんですよ、ゲームなんて。ああ、ゲームってそういうもんだなと思ったんだけど、最後もクリアして、何回か最後まで行ったんです、最終地点までね。最終地点まで行ってクリアしたって言ったら、「あのゲームなら、俺、すごいできるよ」「あんなようなゲーム作って」「あれ、作ってんの？」「あれじゃない。あんなようなゲーム」って。たまたま、そう言ったのが私のドライブゲームと一致したので、どういうものやってるかっていうのがそこで分かったんですよ。初め、彼、おもちゃ、おもちゃって言ってたんで、本当に玩具かなと思ったら、玩具なんか作ってるのか、面白くないなと思ったんですけど。ああいう機械かって、あんなの作るの面白いなと思って、そこでスイッチが入ったんですね。

Q：入社を決める前には、もちろん面接もあるでしょうし。実際に作ってるものとかご覧になったんですか。

西角：その日、行ってですか。

Q：パシフィック工業の。

西角：パシフィック、行って、見せてもらいましたよ、最初行った時はこんなもん作ってるって。その時は「ペリスコープ」みたいなのが置いてあって、やっぱりこんなもんだというの分かりましたよ、おもちゃじゃないんだっていうのは分かったんですね。その時、自分で作ってみたいなと思いました。こういうような、結構、私ならできるなと思った。その時はなぜか、電子工学を目指していたのが、あんまり、それ関係ないんですね。自分の本来の、たぶん、電子工学もそうだけど、おやじのところでものづくりをして、木を切ってやったところ、金をたたいて、曲げたり、いろんな箱を作ったりするのがやっぱり好きだったんですね、基本的には。だから、機械づくりを、作ってるのを見て、やっぱりこういうのを作りたいなと、その時はやっぱり思いましたよね。その時はトランジスタとか真空管なんかはもう。そんなの、荒井さんが「うちに来ても、トランジスタとか使わないよ」「分かった、分かった、分かった」って念を押されましたけど。「それでもいいの？」って言われて「おお、いいよ」っていう話で面接を受けたんです。向こうもちょっと意外だったと思いますよ。私が行く、面接を受けると言ったのがね、だったと思いますよ。

「スカイファイター」の企画・開発

Q：「スカイファイター」に最終的になっていく理由っていうのは、やはり電子を専門にやってたっていうのも関係してくるんですか。

西角：それ、全く関係ないですね。

Q：それも関係ない？

西角：そんなもん会社入った時点で、もう電子忘れたような感じで。メカ、いわゆる全部メカですね、機械設計です。

Q：メカですか。

西角：機械設計がすごく斬新で、ものすごく機械設計が好き。もともとはどっちかというと、電気より機械のほうが好きだったんだなと自分でもなんか分かってない。私、どっちかというと、ものづくり、機械でモノを切ったり、そういう設計を。だから、機械の設計が楽しくて、図面を引くじゃないですか。図面引いて外注さんに出すと思ったようにできている。自分で作らなくても外注さん、たぶん、きれいに図面どおりできてくるじゃない

ですか。自分でも子どもの頃、作ったんですけど、L字型に曲げるのも、うまく曲げたって設計どおり、図面どおりいかないから、削ったり、ものすごい時間かかるんですけども、業者に頼むとターっと1ミリも、1ミリも変わらずに、コンマ何ミリの単位で出来上がってきて、それを組み立てれば自分の思ったようなのができるじゃないですか。これってすごいなと思って、ものすごく感心しました。そんなの当たり前だぞと考えても、自分でやると、そうはならないですよ、こんなボール盤で穴開けても、ちゃんときれいにコンマ何ミリ単位で開かないし、ちょっとずれるし、業者に頼めばピターっと図面どおり、こうする。え、図面どおり、ちゃんとモノができるんだって、当たり前なんだけど、それはすごく感心して、この世界はいいなと思ってすっかりはまったというか、これは自分のやっけていく道だなと思いましたね。

Q：でも、これは企画から開発、全部ご自身でやったんですか、「スカイファイター」。

西角：そうです、そうです。

Q：この企画の「スカイファイター」って考えたのは、上司にもそれを伝えるところから？

西角：そうですね。その松平さんっていう部長さんも技術屋さんなので、製作の時は手伝ってくれましたよ、彼も技術屋なんで。発想っていうか、考えたのが私だった。

Q：なんで「スカイファイター」だったんですか。空がテーマだからですか？

西角：名前は、私が決めたのか、ちょっとそれが定かじゃないですけど。飛行機ものをやろうっていうのは、私が決めたんです。よく見たら、飛行機ものってあんまりゲームになかったんです、その当時、わーっと見たら。タイトーにもなかったし、ほかの会社にもなかったんで、飛行機もののゲームがいいかなあと。

Q：設計図の図面の書き方なんかも全部自分で初めて学んでいったんですか。

西角：そうです、そうです。その時に図面描いて、モノができた時、ぴたっと合うのはもう感動、自分で感動して。

Q：図面の引き方は誰が教えてくれたんですか。

西角：それはもう先輩の図面を見て、ルールを。

Q：見よう見まねで？

西角：見よう見まねですね。機械図面は普通の電気と違って、いろんなルールがあるんですよ、描き方が。半径があったら、外側に矢印を付けてこう描くとかね、そういうような全部ルールがあって、先輩のを見ながら研究したんです。

Q：時々、松平開発部長から「違う！」とか言われたりは。

西角：彼も、彼もそんな機械専門じゃなかったんで、言われなかったんですが、メカ屋さんもいましたから、専門のメカ屋さん何人か。そういう人に聞いていろいろ指導してもらって、違うよとか言われましたね。どっちかというとな身がメカ屋さんっていうの？ 機械工学専門の人のほうが多かったですよ、設計の中では、部署の中では。電子技術屋さんは1人か2人ぐらいしかいなかったですね。

「スカイファイター」の位置付け、企画のヒント

Q：「スカイファイター」っていうゲーム機自体、いろんなバリエーションの中の新しいものというか、位置付けとしては主力部隊というよりは一つのバラエティーとか、そんな位置付けだったんですね、新人に任せるだけあってというか。

西角：そうですね。その当時は開発、設計する人っていうのはそんなにいなかったんで、開発部もですね、5~6人ぐらいでしたかね、それぐらいしかいなかったんで。自分でちょっと案出して考えてみないかっていうことだったと思うんですよ。私、飛行機もので、こういう装置にしたいんですけどって言ったら、「じゃあ、作ってみたら？」って。最初からすぐいくんじゃないくて、最初はやっぱり手作りですよ。鏡を自分で切って、「スカイファイター」の場合はハーフミラーを使ってこうやるんですけど、そういう模型みたいなやつで実験をして、それで松平さんも手伝ってくれましたね。新人だったからでしょうね。

Q：今風に言うと、モックアップみたいなのを作ってということですか。

西角：そうです、そうです。

Q：これ、幻灯機を使って青空を作っている、それは自分で全部発想したんですか。

西角：それはそう、自分で。

Q：何かヒントはあったんですか。

西角：ヒントはあったと思います。ハーフミラー使ってやるようなゲームはどっかに、日本じゃなくて外国のゲームで、どっかで、ああいうゲームセンターかなんかで。ハーフミラー使ってやるのは昔からのテクノロジーだったと思うんで、私が別に考えたわけじゃないんで、昔からあったものだと思いますよ。マジックミラー使ってね、ハーフミラー使って画像合成するっていうの。それを飛行機の、ああいう戦闘機を応用したのはなかったと思うんですけど。

Q：「ペリスコープ」の海面でもそうなんですか。

西角：あれはハーフミラーじゃなくて、普通のミラーですね。ハーフミラーは使ってないですね。

Q：どんなゲーム機がハーフミラーですか、クレーン射撃とかそういうもの？

西角：何があったかな、ちょっと覚えがない。何かあったような気がしますよね。それ、ゲームセンターで見て。

Q：「あ！」と思った。

西角：多分、日本のゲームじゃなかったと思いますね。

Q：それはもう開発当初に、前に気になって見たのを思い出したんですか。

西角：前に何かを見て思い出したね。どっかで前から見てたんでしょうね。

Q：その時、戦闘機に使えると。

西角：ええ。

Q：最初の企画を出した時の反応はどうだったんですか、開発部長の。

西角：びっくりしてましたよ、開発部長、ぜひやろうということで。結構、正直な人なんで、その人は。私も最後までその人だけは信頼してましたけどね。

Q：新人の人に全部開発を任せて。

西角：ええ。

Q：できた反応っていうか、アミューズメントの業者であるとか、そういうところは。

西角：それは、すぐ。ショーでやったんですけど、アミューズメントショーっていうのがあったんですけど、列をなしてましたね。

「スカイファイター」のデビュー、「I」から「II」へ

Q：じゃあ、いきなり大ヒットの予感って。

西角：いきなり大ヒットになりましたんで。

Q：それは1970年。

西角：70年代ですね。

Q：ロケテストはやったんですか。

西角：してないでしょう、多分。ショーで、ショーでいきなりもうデビューですね。

Q：ショーでオペレーターに見せて、それでもう。

西角：デビューです。その前にオペレーターには見せてるんでしょうけど、ショーとオペレーターの時期が近かったような気がしますね。だから、ちょうど8月ちょっと前ぐらいにできたんですかね、完成したかもしれないですね。ショーで、秋のショーで9月ですから、晴海のショーで。それ以降、私も後で「スト II」の時にも見ましたが、あんなふうにする人が順番に列になってましたから、ずーっと。

Q：これで1970年の4月ぐらいから開発に入って、8月にはもう完成してるんですか。

西角：いや、もっと前からやってたと思いますよ、開発は。でも、そんなに長期間じゃなかったような気がしますね。その前に「I」っていうやつ売ってるんですよ、「スカイファイター」の、「I」っていうか、「スカイファイター」っていうのが。

Q : 「I」ができた。

西角 : それで失敗、しくじってるんで。

Q : そうなんですか。

西角 : そうそうそう。それで、小型ものを作って成功したんですよ。

Q : 資料には、70年に「I」があって、71年に「II」があるって書いてあったんですよ。

西角 : じゃあ、そうかもしれないですね。

Q : 「I」は失敗したと。

西角 : 失敗じゃないですけど、非常に評判は良かったんですけど、大き過ぎたんですよ。

Q : 大きい？

西角 : ええ。エレベーターに乗らないって言われてね。

Q : 運搬ができないってということですか。

西角 : 運搬ができない。だから1階にしか、現場は1階にしか置けない。

Q : 搬入できない。

西角 : 限られてて、1階の置ける大きな所っていうのは、タイトーのロケーションとか、そういう所で限られて、小さなオペレーターとか、2階でちょっとやるっていうのは、ボウリング場だとかね。

Q : 雑居ビルのロケーションとか置けないですね、バランス的に。

西角 : 入らないですよ。幾らかちょっと忘れましたが、横幅がすごく大きくて、エレベーターに入らない。

Q：横幅が大き過ぎたので、「II」、1971年に出たのがそれを小さくしたんですか。

西角：小さくしたんですよ。

Q：あとは変わらない、幻灯機使って。

西角：でも、大きさが大きい分があって、迫力が全然違うんですよ。仕掛けがありましてね、中に、「I」はね。今はちょっと現物がないからあれですけど、乗っていると、うわー、雲がこう、何て言うのかな、空の中を飛んでるように、本人が雲の中にいるという、空の中にいるというような雰囲気味わえるんです、「I」のほうは。だから、迫力はあるんですけど。それ入らないから、「II」の時はその道具を取っちゃって、後ろの背景だけですから、全然迫力が違うのよ。だから、「I」をやった人はいないから何とも言えないんですけど、今、「I」は現存してないんですけど。「II」はまだあるんですけどね、はるかに凝ったというか、何て言うのか、リアル感を出したんですけど。ちょっとそれがあだになって、売れないっていうか、注文が入らない。困るよということになった。

Q：ある意味、簡易版っていうやつですね。

西角：簡易版です。だから、幅を小さくして、エレベーターにぎりぎり入る大きさにして。で、小さくしたんです。それはもちろん数が出るっていうことでヒットしたんですよ。だから、「I」はそんなにゲームショーにも出してないと思うんですよ。

Q：そういう作品を2年で出したっていうところに対しての、開発部長とか上司の評価はどうだったんですか。

西角：開発部長はすごく評価はよかったですよ。「これからもまた頑張って、次のもお願いしますよ」なんて言ってましたね。

アメリカから「ポン」が出現

Q：その時、72年に「ポン」がアメリカから出てくるんですね。

西角：その「ポン」の、いや、72年の時は、それは多分、その「スカイファイターII」は71年ですから、まだ「ポン」は出てないと思います。

Q：そのあとに。

西角：そのあとに「ポン」が出てくるんですけど、72年の終わりぐらいじゃないですか。72年、日本に来たのは終わりぐらいか、秋ぐらいですけど。私は「スカイファイター」をやって、開発部長の信頼をもらって、次はもうひとつ、外国から来たゲームを改良した「ボーダーライン」というゲームを1つ作ってるんですけど。それはそんなに、もう骨休めで、よくやったから、ちょっとゆっくりしてよって。ただ、遊んでるのもあれだから、こんなの作ってみてよって、それは上から来た、仕様が来た、今度作ってくれって言って、設計して、短期間で作ったやつなんですよ。

Q：それは1972年？

西角：72年か71年かな。もうちょっと、「ボーダーライン」という。

Q：「ボーダーライン」、海外からの設計図があって、それを。

西角：設計図は、海外からの機械があったんですよ、アメリカなんかで。これを見て、もうちょっと、あんまり出来がよくなかったんで、もうちょっとコストを安くして、見栄え良くできないかなと思って作った。それは今でもね、熊谷に機械を置いてあるんですけどね。現物、この前に初めて見たんだけど、こんなのあるんだと思ったんですけど。作ったけど、それ、短期間で作りました。

Q：それはエレメカですか。

西角：エレメカですね。それ作って、次は、じゃあ、釣りがいいなと思って。その前は釣りのゲームをやりたいなと思って。で、釣りのゲームを企画して、よし次はこれをやろうと思って。開発部長じゃなくて、その時工場長がそこにいましたね。工場の一番、社長じゃないです、工場長がいました。工場長って、あんまり。前、パシフィックの上層部なんで、どうも気に入られてないのかどうか知らんけどね、「おまえ、ちょっと人が足りないから、資材部行ってくれよ」って。荒井さんとはちょっと違う、似たような部署ですよ。資材部行ってくれよ」って資材部行かされましたね。

部署異動：資材部へ、デジタル IC

Q：そうだったんですか。

西角：昔もそんなことあったなと思って、タクトの時に。購買なんだけど、資材部、ちょ

っと違うけど似たようなもんですよね。

Q：そうなんですね、物販の要の。

西角：あの時は辞めたから、今回辞めるのもちょっと大人げない、荒井さんもいるしね、そんなことで辞めるのは。取りあえず、その開発部長も「取りあえず、おまえ、行け」って言うから「分かりました」つつって。開発部長も工場長のほうが上ですから、何も言えないんでしょうから。「開発部長に話ついでるから」「分かりました」つつって。もう、辞めるなら辞めてもいいと思ったかもしれませんが、どう思ったか知らないけど、取りあえず資材に行きましたね。

Q：それで1年間のブランクで「サッカー」を作ろうかなと。

西角：そうですね。「サッカー」を作るんだけど、資材部へ行って、それから「ポン」が来たんですね。「ポン」が来て、資材部に。

Q：「ポン」は輸入版ですよ。

西角：輸入版ですよ。資材部に行って、資材部っていても伝票を書いたり。昔は今みたいなパソコンなんかありませんから、注文書を書いたりするんです、外注さんに部品の注文書。要は購買みたいなもんですよね。

Q：購買ですね。

西角：パッと見た時、全く同じような、購買と同じような。手書きでパッと注文書を書くんですよ、これ。女の子が、パートの女の子の人がいて、一緒になって注文書を書いて。で、午前中書いたら、あとやることないんですよ、午後から。時々、部品を、購入したやつをチェックしたりするぐらいで、ほとんどやることがない。

Q：事務職ですよ。

西角：事務職で、もうほとんど何もしてない。何ヶ月か経っていたか分かんないけど、開発部長の松平さんっていう人が、本を持ってきてくれたんですよ。「おまえ、暇だろう」って、「おい、おまえ、これから本読んどけよ」って、それがね、デジタル IC の本だったんですよ。「暇だったら、お前」って、あの人もすごい先見の明はあったんですよ。「これからはこういう時代が来るかもしれないから、おまえ、読んどけよ」って。昼間、午前中

仕事終わって、昼間ずっと本を読んだ。そこで半年ぐらい、ああ、デジタルや IC って面白いなと思って。自分でそれまでやったリレーの回路を IC に置き換えて描いてみたり、今まであった回路を IC でしたらどうなるか、そういうようなことをやってシミュレーションをやってみたりして、デジタル IC を完璧に理解したんですね、私は。

Q：そこで理解した？

西角：そこで「ポン」が来たんですけど。「ポン」が来たんだけど、デジタル IC なんか分かる人がいないじゃないですか。これから新しいことやろうといってるのに、「誰か知ってるやつ、いねえか」って工場長が言ったら、開発部長が「いや、西角ぐらいやったら分かりますよ」ってことで、また、元に復帰してね。

Q：復帰が 1972 年ですね。

西角：「ポン」が来た、ちょっとあとですね。

Q：じゃあ、72 年後半ぐらいに。

西角：はい。「ポン」が来たあとですね。それもちょっとややこしくて。実際、部署的には開発に行っていないんですけど、もう実質、開発の仕事してました、事務職にしながら。

Q：所属は資材部だけど、開発をしていた。

西角：そうそう、そうそう。だから、部長もあれじゃないですか、すぐ来いって、工場長には言えないけど、実績作るときや何とかなるだろうという感じで。だから、開発のほうに行って、「ポン」を解析したりするのは、まだ部署的には事務職だったと思いますね。「ポン」がある程度、理解できた時点で、「じゃあ、おまえ、こっちへ戻ってこいや」という話で開発に戻ったような気がしますね。

「ポン」からの学び

Q：「ポン」の解析で学んだことって何だったんでしょうか。

西角：「ポン」の解析で学んだことは、テレビゲームの基本、作り方の基本はそこで勉強しましたね。